

「貧しい者、正しい者を虐げよう」(知恵の書 2 章 10 節)

—知恵の書の読解とイエスの知恵についての省察

中ノ瀬重之 (神言会司祭、ベルゴ聖書センター長)

はじめに

土地司牧委員会 (Comissão Pastoral da Terra=CPT) が 2017 年に出した報告書によると、同年に土地問題で 65 人が殺害されたという。事例を挙げると、マットグロッソ州コルニーザで 4 月に 9 人の農民たちが殺された。パラ州パウダクロでは 5 月に 10 名の農村労働者が暗殺された。さらには、 Rondônia 州ヴィリェーナで 3 人。2018 年には、すでに 1 月 24 日に土地なし農民運動 (MST) のリーダーがバイーヤ州の内陸部シャパーダ・ディアマンチーナのイラマイアで暗殺されている。このように、自己の正当な権利を要求する人々が脅迫され抹殺され続けている。しかし、それらのニュースはただローカルなメディアで取り上げられただけで、ブラジルの大半の人々には知られず仕舞いである。さらにひどいことに、殺された人々を卑劣な反乱分子として非難し断罪する者がいるのである。

旧約聖書においても同様に、正しい人々が訴えられ、迫害され、暴力を被る記述が数多く見られる。例えば、紀元前 30 年ころアレキサンドリアで執筆された知恵の書は、正しい者を抑圧し迫害する不正な者の思考と行動についてこう述べている。「貧しい者*、正しい者*を虐げよう。寡婦だからといって容赦しない。白髪をいただく老人も敬いはしない。力をこそ、義の尺度とするのだ。弱さなど、何の役にも立たないから」(知恵 2,10-11)。

* 訳注：原文では聖書の引用はエルサレム版聖書 (BÍBLIA de JERUSALÉM, PAULUS,2002) を使用しています。日本語訳は基本的に新共同訳聖書・旧約聖書続編付き (日本聖書協会) を使用しますが、ここでは os justos を「神に従う者」、os ímpios を「神に逆らう者」など、それに類する言葉に意識しています。この翻訳論文ではポルトガル語の意味のとおり「正しい者・人々」「不正な者・人々」と訳しました。また、その他の引用句についても原文のポルトガル語を私訳した場合には * 印を付けました。

不正な者は正しい人々を殺すために暴力を用いる。「暴力と責め苦を加えて彼を試してみよう。その寛容ぶりを知るために、悪への忍耐ぶりを試みるために」(知恵 2,19)。不正な者とは一体誰のことだろう？多くの「正しい者」たちが残虐に殺され続けているブラジルの悩ましい現実さらされながら、「過去と現在において、不正な者の思考と行動とはどのようなものだろうか」と問わざるを得ない。

1. 不正な者、正しい者、貧しい者

知恵文学において、「不正な者」という言葉は非常にしばしば「正しい者」「貧しい者」の対義語として出てくる。

—「正しい者に向かって不正な者はたくらみ、牙をむく (中略) 不正な者は剣を抜き、弓を引き絞り、貧しい人、乏しい人を倒そうとし、まっすぐに歩む人を屠ろうとする」(詩編 37,12-14)。

—「神に向かって不正な者は言っていた。『ほうっておいてくれ、全能者と呼ばれる者に何

ができる。』それに対してあなたは言った。『神はその彼らの家を富で満たされる。不正な者の考えはわたしから遠い。』正しい人なら見抜いて喜び、罪のない人なら嘲笑って言うであろう」(ヨブ 22,17-19)。

—「正しい人の道は輝き出る光、進むほどに光は増し、真昼の輝きとなる。

不正な者の道は闇に閉ざされ、何につまづいても、知ることはない」(箴言 4,18-19)。

これらの章句において、不正な者とは、正しい者や貧しい者と反対の立場にいて、彼らを搾取し抑圧する人間のことである。彼は悪を行い、神から遠く離れている。「貧しい人が傲慢で不正な者に責め立てられて、その策略に陥ろうとしているのに、不正な者は自分の欲望を誇る。貪欲であり、主をたたえながら、侮っている。不正な者は高慢で神を求めず、何事も神を無視してたくらむ」(詩編 10,2-4)。

実際、不正な者は神から遠く離れて生きているにもかかわらず、その謀りごとはいまよくいき、他の人々より安楽に生きている。彼自身、「わたしは揺らぐことなく、代々に幸せで、災いに遭うことはない」(詩編 10,6) と思っている。正しい者や貧しい者に対して平然と虚偽や悪事を行い、「口に呪い、詐欺、搾取を満たし、舌に災いと悪を隠す。

村はずれの物陰に待ち伏せし、不運な人に目を付け、罪もない人をひそかに殺す」(詩編 10,7-8)。

そのような現実にあって、正しい者や貧しい者は羨望を感じずはいられない。「それなのにわたしは、あやうく足を滑らせ、一步一步を踏み誤りそうになっていた。不正な者の安泰を見て、わたしは驕る者をうらやんだ。死ぬまで彼らは苦しみを知らず、からだも肥えている。だれにもある労苦すら彼らにはない。だれもが病も彼らには触れない。傲慢は首飾りとなり、不法は衣となって彼らを包む」(詩編 73,2-6；cf.ヨブ 21,1-13)。

けれども、ひとつの事実がある。「正しい人の収入は生活を支えるため、不正な者の稼ぎは罪のため」。「富は、罪に汚れていなければ、善である。貧乏が悪であるとは、不正な人の言うことである」(知恵 13,24)。都市でも農村でも社会的不正や暴力、不当な利益の取得が不正な者によって行われている、と預言書や知恵文学は証言する。

例えば、ヨブ記はこのように述べている。「人は地境を移し、家畜の群れを奪って自分のものとし、みなしごのろばを連れ去り、やもめの牛を質草に取る。乏しい人々は道から押しつけられ、この地の貧しい人々は身を隠す。彼らは野ろばのように荒れ野に出て労し、食べ物を求め、荒れ地で子に食べさせるパンを捜す。自分のものでもない畑で刈り入れをさせられ、悪人のぶどう畑で残った房を集める」(ヨブ 24,2-6)。社会的不正と暴力が都市や農村にはびこっている酷い現実である。

知恵文学は—神は正しい者に報いを与え、不正な者を裁き、罰を下される—と主張し続けているが、それを理解するには、このようなコンテクストを念頭に入れておく必要がある。そのような思考は、「主の日」(アモス 5,18) を待ち望む預言者的伝統と共に連綿と続いているのである。

—「まことに神は力強く、たゆむことなく、力強く、知恵に満ちておられる。不正な者を生かしてはおかず、貧しい人に正しい裁きをしてくださる。正しい人から目を離すことなく、王者と共に座につかせ、とこしえに、彼らを高められる」(ヨブ 36,5-7)。

—「不正による富は頼りにならない。正義*は死から救う。主は正しい人を飢えさせられる

ことはない。不正な者の欲望は退けられる」(箴言 10, 2-3)。

— 「不正な者が横暴を極め、野生の木のように勢いよくはびこるのをわたしは見た。しかし、時がたてば彼は消えうせ、探しても、見いだすことはできないであろう。無垢であろうと努め、まっすぐに見ようとせよ。平和な人には未来がある。背く者はことごとく滅ぼされ、不正な者の未来は断たれる」(詩編 37,35-38)。

— 「どこまでも謙遜であれ。畏れを知らぬ者には、火と蛆の刑罰が下る」(シラ 7,17)。

— 「不正な人の成功をうらやむな。彼らは必ず罰せられて陰府に行くものと心得よ」(シラ 9,12)。

— 「いと高き方御自身も、罪人を憎み、不正な人にあだを返される」(シラ 12,16)。

エジプトのアレキサンドリアは、ヘレニズム化したユダヤ教の重要な中心地であるが、そこで書かれた知恵の書にもこのような考え方が多く見られる。正しい者、貧しい者の対極にある不正な者というテーマは、不正な者の最初の供述にすでに現れている(cf. 知恵 1,16-2,20)。「貧しい者と正しい者を虐げよう。寡婦だからといって容赦しない。白髪をいただく老人も敬いほしくない。力をこそ、義の尺度とするのだ。弱さなど、何の役にも立たないから」(知恵 2,10-11)。

不正な人々が正しい者に加える抑圧と迫害は大きく、早すぎる死をもたらすほどである。「正しい人は、若死にしても安らかに憩う」(知恵 4,7)。けれども、この書の著者は、正しい者の早すぎる死は神の望まれることではないが(cf. 知恵 4,10-11)、不正な者が加えた迫害や拷問、暴力に起因するものであると断言する(cf. 知恵 2,10-20)。

また正しい者の早すぎる死は、不正な者が下す有罪判決にさえなりうる。「正しい人の死は、不正な者の生を裁き、若死にした者の死は、不正な老人の長命を裁く。不正な者どもは知恵ある者の最期を見ても、その人への主の配慮を悟らず、なぜ主が彼を安全な場所に移されたかを理解しない。彼らは、その最期を見て軽蔑する。しかし、そういう彼らを主は嘲笑される。その後、彼らは不名誉なしかばねと化し、死者の中で永遠に恥を受ける。主が彼らを地に打ち倒して口を封じ、その基から揺さぶり…」(知恵 4,16-19)。知恵の言葉は繰り返して言う「神は正しい者に報いを与え、不正な者を裁きにかけて罰せられる」と(cf. 知恵 4,20-5,23)。

知恵の書における不正な者とは誰であろうか？著者はそれを突きとめるための具体的な資料を提供していない。ギリシャの政治家たちであろうか？それともローマかエジプトの支配者か？あるいはユダヤ教の背教者たちであろうか？ギリシャ時代の知恵の書に最も近い時期に書かれた文書を読み直してみると、「不正な」という言葉はギリシャ・ローマ文化—ヘレニズムの導入を奨励する者に対して使われていることがわかる(cf. I マカバイ 3,8.16 ; 7,5 ; II マカバイ 4,13 ; 8,2 ; 10,10)。

知恵の書もまた、ギリシャ・ローマ文化の導入を奨励するためにヤハーウェに忠実なユダヤ教徒を抑圧し迫害する集団に、この語句を適用している。知恵の書 1 章 16 節から 2 章 20 節にかけて、非常に明白かつ具体的な形で、このグループの思想や哲学、行動が紹介されている。つまり、自分の人生を余暇と快樂で楽しむために、貧しい人々や正しい人々を搾取し抑圧するのが「不正な者」なのである。

2. 富や権力、快樂と名誉の飽くなき追求

不正な者について最初に語り始める章句 (cf. 知恵 1,16-2,20) では、彼らを紹介すると同時に、その主題についてこのように述べている。「不正な者は言葉と行いで自らに死を招き、死を仲間と見なして身を滅ぼす。すなわち、死と契約を結んだのだ。死の仲間としてふさわしい者だから」(知恵 1,16)。不正な者が死と契約を結ぶ者として紹介されている (cf. イザヤ 28,15)。彼らの言葉と行いは、神の「友」である正しい者や貧しい者を迫害し、傷つけ、殺す。神は「死を造られたわけではなく、命あるものの滅びを喜ばれるわけでもない」(知恵 1,13)。

ここに死の友と神の友が対比されている。その語り口は、不正な者と正しい者の対立というテーマがすでに日々の思いと行動の中に存在していることを示し、著者の(「誤った考え方だ」とする)裁きと非難をこめて、不正な者の「誤った」考えを紹介している。その考え方は、「我々の一生は短く、悲しい*」(知恵 2,1) というギリシャ哲学の潮流の影響を受けるものである。人生の未来に希望はない。なぜか? 端的に言うならば、不正な人々は死後のいのちが存在することを信じないからだ。

「我々の知るかぎり、陰府から戻って来た人はいない」(知恵 2,1) はそのことを証言する言葉だ。あるいは、こうも言う、「我々の年月は影のように過ぎ行き、死が迫るときには、手のつけようがない。死の刻印を押されたら、取り返しが見つからない」(知恵 2,5)。他方、正しい人々の信仰はこれとは反対である。「しかし、神はわたしの魂を贖い、陰府の手から取り上げてくださる」(詩編 49,16)。「息を引き取る間に、彼は言った。『邪悪な者よ、あなたはこの世から我々の命を消し去ろうとしているが、世界の王は、律法のために死ぬ我々を、永遠の新しい命へとよみがえらせてくださるのだ』」(II マカバイ 7,9)。不正な者と正しい者の考え方の根本的な違いは、死後のいのちに望みを抱いているか否かにある。

不正な人々は「人生は短く、悲しい」という主張を強めるために、人生の偶然性について省察する。「我々は偶然に生まれ、死ねば、まるで存在しなかったかのようにになる。鼻から出る息は煙にすぎず、人の考えは心臓の鼓動から出る火花にすぎない。それが消えると体は灰になり、魂も軽い空気のように消えうせる」(知恵 2,2-3)。「煙」、「火花」、「灰」、「軽い煙」…人生はつかの間過ぎゆくもの!

さらに彼らは、人生の記憶にまで話を進めて言う。「我々の名は時とともに忘れられ、だれも我々の業を思い出してはくれない。我々の一生は薄れゆく雲のように過ぎ去り、霧のように散らされてしまう。太陽の光に押しつけられ、その熱に解かされてしまう」(知恵 2,4)。人の名前は、その人の思い出や在りし日のこと、生きてきた道程のすべてを表すものである。つまり、誕生、家族、仕事、他の人々との絆、友愛、正しさなどがその名前に刻まれている。しかし、人生は「短く、悲しい」もの、瞬く間に過ぎていき、彼の記憶もまた消え去るのだと彼らは断言してはばからない。

人生の偶然性やはかなさについての考え方が違うことによって、不正な者と正しい者の対立はますます大きくなっていく。正しい人々は、宇宙が神の創造物であると信じ、そのことを思いめぐらす。創造主の似姿として造られた人類は、宇宙のなかで、愛と正義をもって、労働し、統治し、いのちを最大限に享受すべきである(cf. 創世 1-3 章)。人生には意味があり、思い出や歴史がある。決して単なる「偶然」ではない。そう考えなければ、生きて何をなすべきというのだろうか?

しかし、「短く、悲しい」という人生観を述べたあとで、不正な者はこのように言い放つ。「だからこそ目の前にある良いものを楽しみ、青春の情熱を燃やしこの世のものをむさぼる

う。高価な酒を味わい、香料を身につけよう。春の花を心行くまで楽しむのだ。咲き初めたばらがしおれぬうちに、その花の冠をつけよう。野外の至るところでばか騒ぎをし、どこにでも歡樂の跡を残そう。これこそ我々の本領であり、定めなのだ」(知恵 2,6-9)。「青春の情熱」、「高価な酒と香料」、「春の花」、「ばか騒ぎ」…今ある豊かさを最大限楽しむことだ、なぜなら一回限りの人生なのだから！

コヘレトの言葉の賢者もまた、人生を精一杯生きることと同意してこう言う。「さあ、喜んであなたのパンを食べ、気持よくあなたの酒を飲むがよい。あなたの業を神は受け入れていてくださる。どのようなときも純白の衣を着て、頭には香油を絶やすな。太陽の下、与えられた空しい人生の日々、愛する妻と共に楽しく生きるがよい」(コヘレト 9,7-9a)。食べる、飲む、着る、愛する、喜ぶ…これらはすべての人間の基本的な生の営みで、人間はいのちを享受し、祝っていいのである。人生を幸福に生きよ。

しかし、賢者は「それが、太陽の下で労苦するあなたへの人生と労苦の報いなのだ」(コヘレト 9,9b)と、ひとつの見解を添えている。働いて、その労苦の実を享受すること！よく生きるために労働は必要である。けれども「あなたの」分を享受すべきであり、他の人々の分であってはならない。「神から富や財宝をいただいた人は皆、それを享受し、自らの分をわきまえ、その労苦の結果を楽しむように定められている。これは神の賜物なのだ」(コヘレト 5,18; cf.2,24; 3,2-13)。それは、どのようなものであれ、不正な状況を生み出す貯め込みや搾取、抑圧といった考えを廃止する。コヘレトの言葉はさらに、幸福を求めて働くなかでの民衆の連帯と団結を勧めている(cf.コヘレト 4,9-12)。

反対に、不正な者はあくまでも「我々の本領、我々の定め」に固執する。その中には正しい者や貧しい者、未亡人や長老を入れない。貧しい者の神も入れない。「正しい者や貧しい者たちを虐げよう。寡婦だからといって容赦しない。白髪をいただく老人も敬いはしない。力をこそ、義の尺度とするのだ。弱さなど、何の役にも立たないから」(知恵 2,10-11)。現在の人生を最大限に享受するために、不正な者は弱い人々や正しい者を虐げ、「義の尺度」と称する「強い者の法」に従って「力」や暴力さえ行使する。

弱い人々を虐げる動機は一体何なのだろう？不正な者の答えをひと言で要約するなら、それは役に立たないからである。ギリシャ・ローマ世界の政治家や権力者が心酔するヘレニズム精神の真髄にあるのは、富、権力、快樂と名誉のとどまることのない追求である。それは、物質的財産を生産しない者は「役立たず」で、不正な人々が存在の極みまで楽しむのを妨げる者とさえ見なす価値観である。

不正な者の「義の尺度」はいのちの法とは正反対で、弱い人々を迫害し排除する強者の律法なのだ。言い換えれば、不正な者の正義とは、「弱い人々や正しい人々」を邪魔者にして排除し、「死と契約」を結んで、際限なく「ばか騒ぎ」で物質的財産を享受することなのである。反対に、正しいユダヤ人の世界観においては、いのちを慈しみ、とりわけ、弱い者が生きるように願うみ心を神が示されるのは、正義を通してである。彼はいのちの神である！正しい人々は、弱い者を守るためにこの神と契約を結んでいるのである。

不正な人々自身もそのことを認めている。「正しい者は邪魔だから、だまして陥れよう。我々のすることに反対し、律法に背くといって我々をとがめ、教訓に反すると言って非難するのだから。正しい者は、神を知っていると公言し、自らを主の僕と呼んでいる」(知恵 2,12-13)。だから、彼らは迫害されて当然とあからさまに言っている。正しい人々は、ユダヤ的伝統の「教訓」においていのちの神と契約を結び、弱い者に対して行われている不義をとが

め非難する。それはかつての預言者たちの態度と似ている。「わたしは言った。聞け、ヤコブの頭たち、イスラエルの家の指導者たちよ。正義を知ることが、お前たちの務めではないのか。善を憎み、悪を愛する者、人々の皮をはぎ、骨から肉をそぎ取る者らよ」(ミカ 3,1-2)。死の仲間、悪の愛人である不正な人々は (cf.知恵 1,16)、神を「主よ、父よ」と呼び求める「主の息子」から非難される(cf.シラ 23,1-3)。だから彼らは、正義を実践してすべての人々をいのちへと解放する「神の子ら」に業を煮やすのだ。

不正な人々は正しい者に対する強い非難と敵意の気持ちをあからさまにして、「彼らの存在は我々の考えをとがめだてる。だから、見るだけで気が重くなる。その生き方が他の者とは異なり、その道は正反対だ*からだ。我々を偽り者と見なし、汚れを避けるかのように我々の道を遠ざかる。神に従う人の最期は幸せだと言ひ、神が自分の父であると豪語する」(知恵 2,14-16)と言う。正しい人々は「正反対の道」を持ち、不正な者を「偽り者」、「汚れ」と見なしていると言うのだ。

もう一度問うが、不正な人々が「我々の考え」と言うとき、彼らはどんな考えを想定しているのだろうか？それは、「邪魔者」を排除して、今ある人生を最大限楽しむことである。それは、「主の息子」である正しい者のユダヤ的伝統とは正反対の道である。「主よ、父よ、わが命の神よ、わたしにみだらな目を与えないでください。わたしから情欲を遠ざけてください。食欲や色欲のとりことせず、恥知らずな欲情に引き渡さないでください」(シラ 23,4-6)。これらは、不正な者の富や快楽、権力への果てしない欲望とは真っ向から対立する教えである。

ついに、過去にも現在にも存在する圧政者と同じように、不正な人々は正しい者を拷問し死にいたらしめる行動を始める。「それなら彼の言葉が真実かどうか見てやろう。生涯の終わりに何が起るかを確かめよう。…侮辱*と拷問*を加えて彼を試してみよう。その寛容ぶりを知るために、悪への忍耐ぶりを試みるために。彼を不名誉な死に追いやろう。彼の言葉どおりなら、神の助けがあるはずだ」(知恵 2,17.19-20)。

「侮辱」と「拷問」、「不名誉な死」に、なんと多くの殉教者が追いやられたことか。それらは、長い歴史を通じて繰り返されている邪悪な行為である。ナザレのイエスも苦しめられ、過去から現代に至るまでイエスに従う男女の身に及んでいる。ブラジルでも、一片の土地を求めて闘う農民や労働組合員が何人犠牲になってきたことか？そしてこの先も、どれほどの人々が犠牲になることだろう？不寛容と不正、悪に根差す社会を批判し抵抗する「正しい人々」の存在は、容赦なく排除され続けている。不正な者は常に正しい者に敵対する存在なのだ。

ルカ共同体の文書を読みかえしてみると、イエスが「正しい」と言われていることに気づかされる。「百人隊長はこの出来事を見て、『本当に、この人は正しい人だった』と言って、神を賛美した」(ルカ 23,47)。「正しい」イエスとはどういう人だろう？どうして彼は残酷無比に抹殺されたのだろうか？その時代の不正な人々を非難し、悩ませた彼の思考と行動は、何によって構成されていたのだろうか？彼の知恵、つまり、正義といのちの道とはどういうものだったのだろうか？その道を、今日もなお、イエスに従う男女は歩み続けている。

3. “この人がさずかった知恵はいったい何か？”

安息日になったので、イエスは会堂で教え始められた。多くの人々はそれを聞いて驚いて

言った。「この人は、このようなことをどこから得たのだろう。この人が授かった知恵と、その手で行われるこのような奇跡はいったい何か。この人は、大工ではないか。マリアの息子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではないか。姉妹たちは、ここで我々と一緒に住んでいるではないか。」このように、人々はイエスにつまずいた（マルコ 6,2-3）。

話を聞こうと集まってきた人々は、自分たちと同じ民衆の一人だったイエスをよく知っていたので、彼につまずいた。ラビの学校にも通わなかった卑しい生まれのイエスが、そのように話すことを、彼らは信じられなかった（cf.ヨハネ 7,14-18）。知恵とは、学識豊かな賢人が、その豊富な知識と技術とを用いて生み出し、伝授するものだと考えていたのである。それでは、イエスの知恵はいったいどこから来たのだろうか？「この人は、このようなことをどこから得たのだろうか？」

その答えは、イエス自身の示唆に富んだ言葉のなかに見出せる。「そのとき、イエスは聖霊によって喜びにあふれて言われた。『天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者にお示しになりました。そうです、父よ、これは御心に適うことでした。』」（ルカ,10,21）

ナザレのイエスは、生きるために闘っていたガリラヤ民衆の「小さな人々」の間で生活した。家族や友人たちとの関りの中では、厳しく辛い現実を生き抜くために、日々の体験を分かち合う習慣があった。イスラエルの農民たちが長い歴史の中で蓄えてきた知恵が、そこで語られ、伝えられていた。それらは自然と生活をよく管理するための「規律」であり、生き延びるためになくてはならない知恵であった。

イエスの時代、ヘレニズム的価値観が社会組織のなかに浸透していたので、農民の現実は一層厳しいものになっていた。ローマの支配者はユダヤ人の敵であるエドム人をパレスチナ地域の統治に任命した。ヘロデ大王とその息子たち（アルケラオス、アンティパス、フィリップス）はエドム人である。彼らの統治は抑圧と圧政、暴虐で名高く、貧困や病気、絶望を民の間に蔓延させた。「夕方になって日が沈むと、人々は、病人や悪霊に取りつかれた者を皆、イエスのもとに連れて来た」（マルコ 1,32）。

ヘロデの息子たちはカエサリア、セツフォリス、ティベリアス、ヨタパタなどの都市に、ギリシャ・ローマ様式の豪華な宮殿を建設してその贅沢ぶりをひけらかした。その陰で、パレスチナの人口の約95パーセントを占める農民たちが搾取され、抑圧と暴力に苦しめられたのである。負債がかさんで、家族全員が奴隷として売られる羽目になることも珍しくなかった。「イエスは舟から上がり、大勢の群衆を見て、飼い主のいない羊のような有様を深く憐れみ、いろいろと教え始められた」（マルコ 6,34）。

イエスの運動が生まれ、成長し、知恵に満ちた言葉で民衆を教え導くようになっていったのは、このような農民たちの苦しみや生きるための闘い、正義を求める叫びが渦巻く現実のただ中であつた。「至福の教え」もそのうちの一つである。「さて、イエスは目を上げ弟子たちを見て言われた。『貧しい人々は、幸いである、神の国はあなたがたのものである。今飢えている人々は、幸いである、あなたがたは満たされる。今泣いている人々は、幸いである、あなたがたは笑うようになる。…』」（ルカ 6,20-21）。

貧しい者の至福の教え（cf.マタイ 5,1-12）は、民衆の困窮状況を肯定しているのではなく、そこからの解放を説いたものであり、Q資料から引用されている。それは別名「ガリラヤの福音書」とも呼ばれ、ルカによる福音書とマタイによる福音書の共通資料であるが、マルコ

による福音書にはその引用がない。恐らく、紀元後40年代にゲネサレ湖かガリラヤ周辺地域で成立したひとつのイエスの語録集である。そこには、その地域のカファルナウム、ベツサイダ、コラジンといった小都市のことが述べられている。

Q資料の主要テーマは、「神の国」と「人の子」についての最終審判と、ユダヤ的知恵の伝統によく現れる日常生活の倫理教育である。それはローマ帝国の支配下で、ガリラヤの貧しい農民が被っていた日々の心配事と苦悩から生まれた知恵の教訓であった。

詩編22編、31編、73編などに見られるユダヤ的伝統によれば、至福の教えは知恵の教訓の一例である。即ち、神は貧しい者、悩む者、飢えている者と共におられ、神の国は彼らのものである。Q資料の知恵の教説は、そのようにガリラヤ湖畔の民衆の苦しい現実から生まれたものであったに違いない。それは、ローマ帝国による奴隷化社会を批判するのみにとどまらず、兄弟愛と助け合いの社会（神の国）を築くために、可能な限りの知恵教育を示している。

a) 「しかし、わたしの言葉を聞いているあなたがたに言う。敵を愛し、あなたがたを憎む者に親切にきなさい。悪口を言う者に祝福を祈り、あなたがたを侮辱する者のために祈りなさい。あなたの頬を打つ者には、もう一方の頬をも向けなさい。上着を奪い取る者には、下着をも拒んではならない。求める者には、だれにでも与えなさい。あなたの持ち物を奪う者から取り返そうとしてはならない。人にしてもらいたいと思うことを、人にもしなさい」(ルカ6,27-31)。

「敵を愛しなさい」は、当時の指導者たちの説いていた「目には目を、歯には歯を」の原則とは真っ向から対立し、差別や強奪、搾取や戦争などを引き起こし、正当化し、拡大していく暴力と復讐の連鎖を断ち切る教えである。また、勝者と敗者の間に執拗に続く敵対関係をも終結させる。そのようにして、愛敵の教えは、強者の知恵に抵抗し批判しながら、苦しむ農民たちを憐れみと赦しに基づいた兄弟愛と助け合いの生活によって生きるように導いていくのである。

b) 「祈るときには、こう言いなさい。『父よ、御名が崇められますように。御国が来ますように。わたしたちに必要な糧を毎日与えてください。わたしたちの罪を赦してください、わたしたちも自分に負い目のある人を皆赦しますから。わたしたちを誘惑に遭わせないでください』」(ルカ11,2-4)。

隣人愛はひとつの理想でも、単なる教えでもない。それは、見返りを求めない愛と分かち合いを実践する、具体的な生き方である。農民の現実において、負債が膨れ上がる原因のひとつは、主として税金を支払うために不当な利息付きの借金をせざるを得ず、それを返済できないからである。他方、金銭を得た場合には、イエスの知恵の教えは分かち合いと助け合いの経済を提唱する。

c) 「どんな召し使いも二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を軽んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない」(ルカ16,13)。

「富に仕える」という表現は、ローマ帝国が持ち込んだヘレニズム的政治の支配下で苦しむパレスチナ農民の現実を反映している。ヘレニズムは、富や権力、快楽、名誉の飽くなき追求を特徴とし、大土地所有を拡大し、大都市（デカポリス）を発展させ、(徴税とあくど

い商法で) 不正に蓄め込んだ「富」によって特権階級を優遇していた。

けれども、「神に仕える」ということは、財産や土地の分配を求める闘いを表すものである。現代のグローバル市場世界にあっても、金銭崇拜に追従する者たちが、飢餓と戦争によって死をもたらし続けている。

d) 「大勢の群衆が一緒について来たが、イエスは振り向いて言われた。『もし、だれかがわたしのもとに来るとしても、父、母、妻、子供、兄弟、姉妹を、更に自分の命であろうとも、これを後回しにしなければ*、わたしの弟子ではありえない。自分の十字架を背負ってついて来る者でなければ、だれであれ、わたしの弟子ではありえない』」(ルカ 14,25-27)。

この「父、母…を後回しにしなければ」、別の訳では「憎まないならば」という箇所には少なからず戸惑いを覚える。しかし、イエス時代のパレスチナでは大多数の人々が負債にあえぎ、土地も家もなく、当てもなくさまよっていたのである (cf.ルカ 6,17-19; マルコ 3,7-12)。その現実を考えるならば、このイエスの知恵の言葉は、打ち捨てられ、遠ざけられ、暴力や飢え、病いに苦しんでいた民衆自身のところに困難に立ち向かう力を呼び覚ますものであったに違いない。実際、イエスの運動は、新しい家族や新しい家庭の形成を提唱する。「見なさい。ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。神の御心を行う人こそ、わたしの兄弟、姉妹、また母なのだ」(マルコ 3,34b-35)。

e) 「野原の花がどのように育つかを考えてみなさい。働きもせず紡ぎもしない。しかし、言っておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。

今日は野にあって、明日は炉に投げ込まれる草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことである。信仰の薄い者たちよ」(ルカ 12,27-28)。

創造主なる神への信仰は、見返りを求めず分かち合う新しい生き方を生み出すものである。ローマ帝国やヘロデ王家の支配者のように物質的な財産に執着し過ぎる者は、自らを神の座に据えて他の人々を搾取するようになる。正義、交わり、友愛といった神の国の価値に従って人間らしく生き、行動することが必要なのだ(cf.ルカ 12,30-32)。

敵を愛し、負債者を赦し、金銭に仕えず、父母のことは二の次にして、まず神を信ずること、これらのことはすべて、社会から周縁化され、排斥されていた人々を励まして人生を取り戻させるものである。それらは、日々の生活の中で神の国を建設しながら生きながらえ、いのちを守っていく道を、民衆に指し示す知恵の言葉にほかならない。「神の国を何にたとえようか。パン種に似ている。女がこれを取って三サトンの粉に混ぜると、やがて全体が膨れる」(ルカ 13,20b-21)。

おわりに

不正な人々が、「邪悪な考え」によって今もなお搾取や破壊、死を惹き起こし続けている私たちの現実の中で、いのちを分かち合う共同体の建設について、どのように言うことができるだろうか？ ブラジルにあっては、この5年間に、正義やいのちを擁護した政治家や活動家が少なくとも 194 人抹殺される結果となった。今年 3 月 14 日にリオで起こった、人権擁護派議員マリエリ・フランコの暗殺事件がその一例である。その事件は、正しい者に対する不正な者の絶え間ない暴力行為として報告され、歴史に記されるに違いない。私たちが聖

書を読む際に、立ち止まって知恵の書の著者のような賢者を探し求めるならば、正義とは知恵といのちに至る道であることに気づかされるに違いない。すべての人々にいのちを得させるために正義を求めて闘いながら、私たち自身を神と他者に開け渡していくこと、それが解決への糸口である「神が死を造られたわけではなく、命あるものの滅びを喜ばれるわけでもない。……」(知恵 1,13-15)。「回心するのに遅すぎるといことはありません。急いでいま、今日という日に始めましょう！」(教皇フランシスコ)

【出典】

Shigeyuki Nakanose. *Vamos oprimir o pobre e o justo. Vida Pastoral*・ano 59・no. 232. Paulus, São Paulo(Brasil),2018

【参考文献】

CHEON, Samuel. *The Exodus Story in the Wisdom of Solomon*. Sheffield: Sheffield Academic Press, 1997.

COLLINS, John J. *Between Athens and Jerusalem: Jewish Identity in the Hellenistic Diaspora*. Grand Rapids: Eerdmans, 2000.

CONFERÊNCIA DOS RELIGIOSOS DO BRASIL (CRB). *Sabedoria e poesia do povo de Deus*. São Paulo: Loyola, 1993. (Tua palavra é vida, 4.)

GRABBE, Lester L. *Wisdom of Solomon*. New York: T&T Clark Study Guides, 2003.

HENGEL, Martin. *Jews, Greeks and Barbarians: Aspects of the Hellenization of Judaism in the pre-Christian Period*. Philadelphia: Fortress, 1980.

HORSLEY, Richard A. *Paulo e o império: religião e poder na sociedade imperial romana*. São Paulo: Paulus, 2004.

_____; DRAPER, Jonathan A. *Whoever hears you hears me: Prophets, Performance, and Tradition in Q*. Pennsylvania: Trinity Press International, 1999.

LÍNDEZ, José Vílchez. *Sabedoria*. São Paulo: Paulus, 1995. (Grande comentário bíblico.)

LINEBAUGH, Jonathan A. *God, Grace, and Righteousness in Wisdom of Solomon and Paul's Letter to the Romans*. Leiden: Brill, 2013

PEREIRA, Ney Brasil. *Livro da Sabedoria: aos governantes, sobre a justiça*. Petrópolis: Vozes, 1999. (Comentário bíblico – AT.)

SCHIFFMAN, Lawrence H. *From text to tradition: a history of Second Temple and Rabbinic Judaism*. New Jersey: Ktav, 1991.

STORNILO, Ivo. *Como ler o livro da Sabedoria*. São Paulo: Paulus, 1993. (Como ler a Bíblia.)

WILLIAMS, Margaret H.: *The Jews among the Greeks & Romans: diasporan sourcebook*. Maryland: The Johns Hopkins University Press, 1998.

WINSTON, David. *The Wisdom of Solomon*. New York: Doubleday, 1979. (The Anchor Bible.)

翻訳：小井沼眞樹子（日本キリスト教団宣教師）